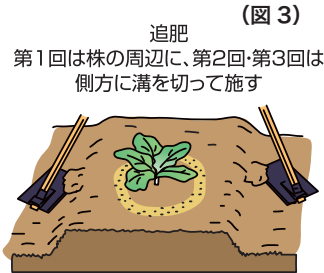
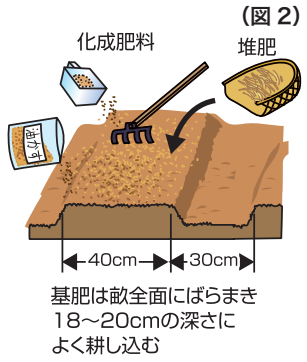
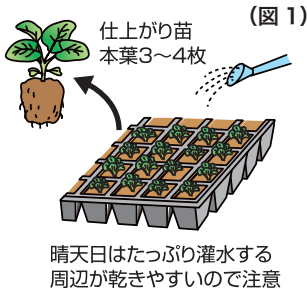




出来の良いハクサイの球は、70枚の大小多くの葉から構成されています。これだけの葉を、天候の変わりやすい夏から秋にかけての短期間で育て上げるには四つのポイントがあります。それは「まきどき」「苗作り」「基肥と追肥」「病害虫対策」です。要点は次の通りです。

①まきどきを守る

まきどきは8月下旬ですが、早過ぎると暑さのため生育不良や病害虫に悩まされるし、遅過ぎると低温になり、また花芽が分化し葉の大きさや枚数が確保できなくなります。生育適温は15〜20℃な

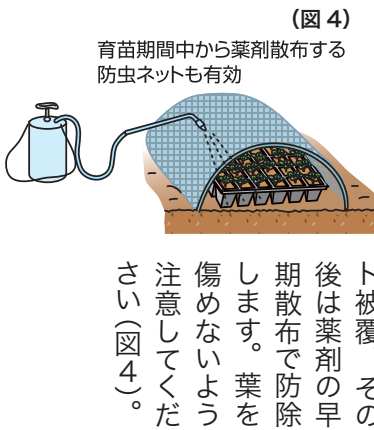


で、その温度帯に最大生長期が重なることが大切です。品種の特性と地域に合ったまきどきを守ることで、まきどきの幅は5日ぐらゐと限定されます。

②セルトレイで健苗を作る

128穴のセルトレイを用いるのが便利です。育苗専用の、ピートモスを多めに含んだ用土を用い、各穴に均一に詰め、軽く指先で押さえ調整し、セルの仕切りが見えるようすり切り、たっぷり灌水してから、各穴4〜5粒の種をまきます。そしてふるいで均一に3〜4mmの厚さに覆土し、もう一度軽く灌水し、新聞紙を2枚重ねに覆い、乾いたら上から灌水します。3〜4日で発芽するので、遅れずに新聞紙を取り除き、晴天なら朝夕灌水し、育つにつれて間引き1本立てにし、20日ほどで本葉3〜4枚の苗に仕上げます(図1)。

植え付けは1カ所2本ずつとし、



本葉4〜5枚になったら1本立てにしましょう。

③基肥と追肥を入念に

ハクサイは多肥を好むので、基肥には良質の完熟たい肥と油かす、化成肥料、できれば有機配合も加えて多めに施します。根系は浅く広く分布するので、畝全面にばらまき18〜20cmの深さによく耕し込みます(図2)。

追肥は植え付け半月後に第1回を株の周りに施し軽く土に混ぜ込みます(図3)。その半月後に第2回を、さらに12〜14日後に第3回を、畝の側方に軽く溝を切って化成肥料を施し、畝に土を寄せ上げます。こうして短期間にどんどん生育させましょう。

④病害虫対策

育苗中や定植後アブラムシやヨトウムシにやられやすく、生育盛りに入ると軟腐病、黒斑病、ベト病などに要注意。初期に防虫ネット被覆、その後は薬剤の早期散布で防除します。葉を傷めないよう注意してください(図4)。

※お気軽に各営農センター(営農購買課)へお問い合わせください。

※折込みの「秋冬野菜用資材申込書」でお申込みください。

【成分】

12(チッソ)・8(リンサン)・8(カリ)・2(苦土)・0.4(マンガン)・0.2(ホウ素) 約50%が天然由来

●低コスト肥料
●土づくり+肥料効果
●粒状なので散布もラクラク
●製造時の火力乾燥により、雑草種子や病原菌などの混入の心配がなく、安心・安全

法律が改正され、たい肥と普通肥料を混合造粒した肥料の販売が可能になりました。そこで誕生したのが「エコレット」です。

全農とのコラボ
「地元応援キャンペーン」
エコレット288ご購入の方に抽選で
近江牛5000円相当
プレゼント
(県内30名様 平成28年10月末まで)



肥料・農薬のご紹介